日本近代短歌における〈風景〉というキイ・コンセプトの再検討
——前川佐美雄と大和

リース・モートン

1995年に出版された*Landscape & Memory*という著書の中で、サイモン・シャーマは、「文化とはまったく何の関係もないと思える風景でも、よく見てみるとやはり文化の産物であり、このことは嘆くべきことではなく、むしろ喜ぶべきことだ」と書いている。[1]「風景」というキイ・コンセプトをここで再検討するために、奈良県出身の歌人、前川佐美雄（1903–90）が大和を詠んだ短歌を検討してみると、奈良という「風景」概念の構築の過程が見えてくる。前川佐美雄は1930年代にモダニスト短歌のパイオニアとしてその名を馳せた歌人だが、みずからの故郷、大和について千首を超える秀逸な短歌作品があり、風景描写でも彼に並ぶ歌人はおらず、20世紀の代表的歌人として注目されるべき人である。佐美雄にとって「旅」とは、西洋の美術、モダニズムへの道のりを意味しており、その「旅」の概念はまた、生まれ育って人生の大部分を過ごした土地、奈良、さらに広くは大和への回帰を指していたことは重要である。大和とは、現在の奈良地方の旧名であるばかりでなく、710年から784年まで都であったこの都市に付随する豊かな文学的・歴史的連想を呼び起こす言葉でもある。佐美雄の処女歌集『植物祭』（1930年）には、純朴な桃源郷、奈良で育った影響がよく見える。「旅」という概念がもつ二つの面が、佐美雄の青春の最初の実りといえる『植物祭』などの歌集にどのように組み込まれて具体化されたかを検討し、奈良という土地の起伏や伝統が佐美雄にとってどのような意義をもっていたかを見ていきたい。

さらに、奈良について佐美雄が書いた主要な二つの作品、『大和六百歌』（1971年）と『大和まほろばの記』（1982年）を詳しく分析して、奈良という土地が彼の歌に意味するものをたどってみる。『大和六百歌』の後書きに、「題して「大和六百歌」、奈良・大和の歌ばかりである。私がこれまで詠んだ歌の一割ぐらい、千首ほどの中から選んだ」と書かれている。『大和まほろばの記』は旅日記でもあり、歌の記録帳、地域の地理・歴史・文化・文学・記念碑などの記録でもある。ここに収録された奈良についての歌を追っていくと、風景という概念そのものに対する佐美雄の理解と、この素朴な土地が惹き付けてやまない魅力の変遷が見てとれる。

この論文を故服部隆一先生に捧げます。

1　Simon Schama. *Landscape & Memory*. London: Fontana Press, 1995, p. 9.

1　若き歌人としての佐美雄像

前川佐美雄

1922年に20歳だった佐美雄は、東京の大学へ入学するために奈良を出た。それ以前にも若い佐美雄は、のどかな奈良、家族に囲まれて育った環境などについての歌を多く詠んでいた。祖父、前川佐重郎は、大阪府と奈良県の境にある葛城山のふもとの忍海という小さな村の村長で、田舎ではあるが土地持ちの由緒ある家柄であった。[2] 次の短歌からわかるように、佐美雄は若い頃から芸術・学術に興味をもっていた。

若き日の	When I was small
生命(いのち)かなしと	My life was sad
絵筆もち	With paintbrush in hand
丸き鏡に	Into the round mirror
のぞき入りけり	I stared forever[3]

若者にありがちなナルシシズムと、田舎育ちということについての複雑な感情がうかがえる。この歌は、1920年、佐美雄が17歳の時に詠まれたが、世に出たのは半世紀後に自家出版された歌集『春の日』が初めてであった。[4] 1943年に出版されたこの歌集『春の日』は、18歳から24歳までに詠んだ歌の中から、佐美雄自身がのこしたいと思う歌を集めたもので、これが事実上の処女歌集である。生い立ちと故郷奈良への想いを詠んだ歌を何首か見ていこう。

ふるさとに	Coming back
かへり来たりて	To my home village
弟と	With my little brother
夜々(よよ)は蛙を	Every night listening to the frogs
聞きてねにける	We fall asleep[5]

玉かぎる	On this

2　三枝昂之『前川佐美雄』五柳書院、1993年、18–19頁。
3　前川佐美雄『前川佐美雄全集』第2巻、砂小屋書房、2002年、41頁。
4　同上、592頁。
5　前川佐美雄『前川佐美雄全集』第1巻、33頁。

夕べとなれば	Gem-glistening evening
悔多し	I have many regrets
この山裾に	Making my life here
われ生きむとす	At the foot of a mountain[6]

第五歌集『春の日』(1943)

「玉かぎる」というのは、「夕」や「ほのか」を導く枕詞で、ほのかに夕日がかがやくというほどの意味である。この二首は、奈良の豊かな歴史や文化など、故郷の過去を思う歌ではない。むしろ故郷の田舎くささに複雑な思いを抱く若き佐美雄の、ほとんど故郷からの疎外感ともいえる感じを与えている。1930年の歌集『植物祭』は、故郷を去って上京したのちの1926年から28年にかけて詠まれた歌を集めた佐美雄の最初の歌集で、その疎外感はさらにはっきりと現れている。

何んとこの	Coming home
ふるい都(みやこ)に	To this
かへりきて	Ancient capital
ながい歴史を	Days come when I
のろふ日もあり	Curse its long history[7]

體力の	On afternoons
おとろへきつてる	When I am
晝ごろは	Utterly exhausted
日本(にほん)の植物が	I hate all
みな厭(いや)になる	Japanese plants[8]

ここで、この二冊の歌集に収録された奈良についての歌が、すべてこのように個人中心的な詠いぶりというわけでもなく、どちらの歌集にも、古都奈良とその周辺の文化遺産を思い起こさせる歌がある。『春の日』に収録された歌は、どことも特定できない森や山に囲まれた故郷での生い立ち、日常を詠んだものが多い。次の歌は、真言宗豊山派の長谷寺を主題として詠まれた七首のうちの一首で、この主題はどんどん育って、のちに奈良についての佐美雄の短歌を席巻するようになる。これは、この寺にある観音像についての歌である。[9]

6　同上、40頁。
7　同上、125頁。
8　同上、159頁。
9　長谷寺は奈良県桜井市にあり、686年に建立され天武天皇に献納された。727年に十一面観音像がもと

観音の	The purple
み胸(むね)あたりに	Wistaria
たてまつれる	On the holy breast
藤のむらさき	Of the Goddess of Mercy
なびけと祈る	How I pray it would dance![10]

長谷寺は、観音像とともに藤でも有名だが、この「藤のむらさき」という奇抜な表現は、通常の仏教的な荘厳な雰囲気に明るさを添えるための比喩なのだろうか、山の上にある寺に外からの風を吹き入れ、観音像があたかも命を得て息をし始めるような効果をあげている。

佐美雄の第三歌集『大和』は、1940年に出版され、1936–39年に詠まれた歌を収録しているが、大和についての歌はわずかしかない。次の歌はその中の一首で、東京に住みながら、先祖代々が暮らしてきた土地、奈良への郷愁の念が伝わってくる。

祖先(みおや)らを	Musing on my ancestors
遠くしぬぶは	From so far away
四方山(よもやま)も	Mountains all around
かすみて見えぬ	I think of Yamato
大和と思ひ	Invisible in the mists[11]

2　風景を芸術に――『大和六百歌』

先に述べたように、前川佐美雄は『大和六百歌』に大和に関する短歌だけを集めて1971年に出版した。[12] その後書きに、佐美雄はこう書いている。

> 私は大和の生まれ、奈良に住んで幾十年、ただの奈良人である。奈良に骨を埋めるつもりでゐたが、昨年末、茅ヶ崎に移った。いろいろに訊かれるが、健康のためである。海風がよいからだが、また隠れ棲むのに適してゐる。この私を人々はあはれと思ってくださる。ありがたいけれど、再び奈良へ帰り住むことはないだらう。それで奈良との別れ、記念のために集を編んだ。
>
> 題して「大和六百歌」、奈良・大和の歌ばかりである。私がこれまで詠んだ歌の一割ぐらい、千首ほどの中から選んだ。二十代から今日まで、およそ五十年間、新旧入

の寺の近くに安置された。和歌や散文の古典にしばしば出てくる寺である。

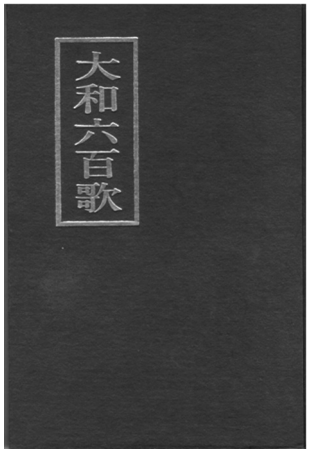
10　『前川佐美雄全集』第1巻、89頁。

11　同上、297頁。

12　佐美雄の第三歌集『大和』（1940年）では、全部で550首あるうち、15首だけが大和に関するものである。詳しくは、島津忠夫『島津忠夫著作集』第9巻、225–26頁を参照。

りまざりである。見苦しいけれど、やむをえない。これを奈良、佐保、佐紀、西の京といふふうに十一地区別にした。便宜的だが、おのづから名所歌、巡遊歌集のやうな形になった。

奈良・大和のあちこちはおほかた詠んだつもりだが、残してゐるところも多い。近しすぎて詠めなかった、また詠まなかったといふことや、まだ知らないところもある。いつかそれらを詠みたい。詠める日あらばと願ってゐる。[13]



『大和六百歌』(1971)

この歌集に収録された短歌は、ほとんどが戦後の作品である。佐美雄の前衛短歌は、戦前のプロレタリア短歌界で他に並ぶもののないほど主導的な位置にあったが、次第にプロレタリア短歌の実験に背を向けて、彼自身が「新古典主義」と呼んだ、オーソドックスでありながらもモダニスト短歌の影響を否定しない新しい作風へ移っていった。戦後の短歌界の主流となった昔の同士たちは、佐美雄が戦時中に愛国短歌を詠んだことを非常に厳しく批判した。そのような中で出版された歌集『大和六百歌』に収録された短歌は、ロシア・フォルマリズムの理論を借りると、短歌が最初に詠まれた時の文脈と、配置換えのあとの前後関係から新しく構成される文脈との二つの概念的次元・文脈が重なって現れている。その文脈が歌の意味を決定することで、奈良の風景は、宗教的、ときに現世的・歴史的・文化的・個人的な連想をひき起こし、歌のまわりに幾重もの微妙なニュアンスが次々に現れる。こうして出来上がった歌の再編成が歌集『大和六百歌』であり、これは配置換えの結果生まれたもの、いうならば置き換えの詩学のバリエーションである。詩的な地名が歌に複雑さを加え、のちの散文書『大和まほろばの記』では、作者本人が気の向くままに歌を取捨して、奈良についての歌に彼なりの解釈を与えている。『大和六百歌』からまず三首、奈良についての歌の層になった芸術性を見ていくこととしよう。

いにしへの	Around the old ruins
宮址どころ	Left from bygone days
はや夏の	The yellow dragonflies
黄蜻蛉飛(きぁむば)べば	Of early summer dart about
青蜻蛉飛(あをぁむば)び	Blue dragonflies scooting[14]

この歌には「佐保山南陵」という見出しがついており、奈良でも御陵の多い地域、とく

13　前川佐美雄『大和六百歌』短歌新聞社、1971年、303-04頁。
14　『大和六百歌』53頁、『前川佐美雄全集』第1巻、527頁。

に聖武天皇陵のある地を指している。この歌が収められる章の題名は「天平稚児」で、「五月二日聖武天皇祭」という見出しもある。この歌からは、日本のいにしえに馳せた思い、この地方への思い入れがうかがわれる。聖武天皇は、724年から749年、天平時代に在位した天皇で、743年に東大寺と大仏を建立するなど、日本を仏教国家にし、また退位したあと出家した初めての天皇として知られている。[15]次の短歌を見てみよう。

春がすみ	The spring mist
いよよ濃くなる	Thickens still more
真晝間の	Right on noon
なにも見えねば	Nothing is visible
大和と思へ	This, believe this above all, is Yamato[16]

この歌は、佐美雄の代表作として知られている。何も見えないからこそ、日本の歴史的中心地である大和の伝説、想像上の大和がこの歌の詠者と読者の眼前にくっきりと姿を現すというパラドックス（究極的にモダニストのパラドックス）を使った発想が中心となっている。[17]この歌について、三枝昂之は次のように書いている。

> この名歌を時代読みすることなど野暮というものであって、「なにも見えねば」にも時代の嘆きを見る必要は全くない。強いていうのであれば、このような名歌が、時代なぞ消し去ってそれ自体が一つの美のエキスであるような名歌が、なぜこの時期に生まれたかということだろう。いってみればそれは、時代への失意がバネになった、非在のものを見つめようとする遠望観といったものではないだろうか。この遠望への意志が「なにも見えねば大和と思へ」という絶唱を生み出した、ということはいってもいいように思われる。[18]

この歌はまた、物理的な奈良という土地と、過剰に規定された概念上の奈良を示唆することによって、作者が故郷に抱いている愛と憎悪という逆説的な感情を表現していると見ることもできる。つまり、そういう二つの奈良があることを知って初めてものが見えるわけだが、見ようとすることによって概念の混乱が起き、結果的に「何も見えない」というこの歌の核心となるパラドックスに我々読者は引き戻される。

この歌は、『万葉集』の数々の歌に詠われた三輪桧原神社にある歌碑に刻まれている。三輪山は、古くから山そのものが御神体と見なされ、信仰の対象となってきた山である。そのような宗教的憧憬が上記の概念的な混乱とパラドックスに加担して、この歌になった

15　*Biographical Dictionary of Japanese History*. Tokyo: Kōdansha, 1978, pp. 60–61.
16　『前川佐美雄全集』第1巻、296頁。『大和六百歌』159頁。
17　伊藤一彦『鑑賞現代短歌1　前川佐美雄』本阿弥書店、1993年、84–85頁。
18　三枝『前川佐美雄』85–86頁。

のかもしれない。[19]

次の歌は、『大和六百歌』の中の興福寺についての章に収録されており、不動明王に仕える制吒迦童子が詠まれている。制吒迦童子は紅蓮色の肌をもつといわれ、夕焼けの紅色で連想を喚起している。佐美雄の第四歌集『天平雲』（1942 年）が初出で、1941 年の作とされている。

きさらぎの	On a evening
天が紅みつ	In February
夕べにて	The sunset clouds glowing crimson
制吒迦童子が	The youth Cetaka, servant of Boddhisattva Acala
われを招くよ	Beckons me hither[20]

なかなか解釈の難しいこの歌についてはあとで言及することにして、まず初出の『天平雲』という歌集が出た時代文脈について検討することが重要であると思う。三枝昂之は、1930 年代、そして十五年戦争が太平洋戦争へと拡大していく直前の時代相が見えるという。この歌集は、愛国的な短歌を通じた佐美雄の公的な顔と、美と芸術の理想にしがみつこうとする短歌を通じたプライベートな佐美雄の顔という二つの顔を見せている。[21] 前出の制吒迦童子の歌は、『天平雲』の中の「百花」と題される巻末の六首の中の一首である。この一連の歌の中に、次の二首も並んでいる。

こほろぎの	Guided by
夜啼くこゑに	The voice of the crickets
みちびかれ	Singing in the night
萬象とともに	Every one together
疑はず寝る	Falls asleep with no doubts whatever[22]

大正の	Granted the holy
御代の教育を	Wisdom of
受けて来て	The Emperor Taishō
かへりみる今は	Looking back

19 Klaus Antoni. “The ‘Separation of Gods and Buddhas’ at Omiwa Shrine in Meiji Japan.” *Japanese Journal of Religious Studies* 22: 1 (1995), p. 140. この歌は、奈良にある前川家の墓にある歌碑にも刻まれているほか、戦前・戦後を通じて何度も編纂された前川選集にも収録されている。清水忠夫『清水忠夫著作集』第 9 巻、230 頁を参照。

20 前川佐美雄『大和六百歌』29 頁。『前川佐美雄全集』第 1 巻、378 頁。

21 三枝『山川佐美雄』219–22 頁。

22 『前川佐美雄全集』第 1 巻、377 頁。

さびしきかなや　　Today how sad things are![23]

この二首は、日本がこれから導かれていこうとする暗い道への、少なくとも、不安を表現していると言える。「疑はず寝る」と書くことで、太平洋での戦争に対する作者の疑いが明白に意識されている。二首目の、政治界では大正リベラリズム、芸術界では前衛が思い浮かぶ平穏な大正時代と、軍事色の濃い現実の昭和時代との対比が非常に印象的である。初出歌集の文脈をこうして見たあとに、前出の制吒迦童子の歌について考えてみると、不空羂索陀羅尼経に書かれている、いたずら小僧のような微笑ましい様相の制吒迦童子と、不動明王の恐ろしい形相とのコントラストを詠んだものなのかもしれない。[24]つまり、平和を象徴する若者が詠者を招いているわけで、やはり平和と戦争の対比を見いだすのである。この歌はただ仏教への信仰を表現するという意図をもって『大和六百歌』へ編纂されたのかもしれないが、歌の配置替え、あるいは置き換えによって読み方がすっかり変わってしまうということは、大変興味深いことである。

3　風景と観光――『大和まほろばの記』

『大和まほろばの記』で佐美雄は、短歌を通して、日本の詩歌の伝統と、文化的記念物、とくに仏教的な記念物とをしっかりと結びつける努力を続けている。たとえば、13 章あるうちの五番目の章では、佐美雄は、伝統和歌の習わしを踏襲しようとしているのがわかる。この章は、白毫寺と神野山と光仁天皇陵のある地域を中心とする奈良の山々と寺と御陵についての描写である。奈良の丘陵地帯をゆく佐美雄の旅は、一首の短歌から始まり、まずは歩いて、そしてバスや電車やタクシーを利用して進んでいく。いくつかの寺を訪れ、丘陵を歩いたのちに佐美雄は高円山へ到着し、皇室とこの地域とのつながりを和歌で綴る『万葉集』の一部を長々と引用している。読者に土地と歴史の感覚を伝えるために、『万葉集』の和歌から二首を選んで分析し、さらに自作の短歌を載せている。[25]そののち佐美雄は山越えを短歌と散文で綴っていく。

高円の　　Climbing over
山越えて行く　　Mt. Takamado
かげとものの　　Accompanied only by my shadow
ぼろぼろの道の　　On the rock-strewn trail
藤のむらさき　　How purple the wisteria![26]

23　同上。
24　Inagaki Hisao, ed. *A Dictionary of Japanese Buddhist Terms*. Kyoto: Nagata Bunshōdō, 1985, p. 54。
25　前川佐美雄『大和まほろばの記――美しい山河を謳う』角川書店、1982 年、70–73 頁。本書を最初に貸してくださった佐伯泰樹先生に感謝します。
26　前川佐美雄『大和まほろばの記』73 頁。

険しい山道を一人登っていく旅人を中心とした素直な歌である。1971 年出版の歌集『白木黒木』の中に、影だけを友とする一人の旅人の代わりに「古道」とある以外はほとんど同じ歌がある[27]。しかし、後年の旅日記『大和まほろばの記』には、この歌のあとに次の記述が続いている。「腰をおろして一休みする。ま下は深い谷だ。水音がする。岩井川である。ところどころ滝のように落ちているのが見える」[28]。ここには実際の山の風景と、その風景の中で山登りをする人影が見える。ほとんど想像だけの風景とはちがって、これは実際の風景の近代的な概念といえる。

『大和まほろばの記』（1982）

16 世紀のフランスにおける詩と風景について、ルイザ・マッケンジー（Louisa Mackenzie）は 2011 年の著書 *The Poetry of Place* の中で、近代の詩人の風景観は、いかに前近代の詩人と異なっているかを論じているが、これは佐美雄にも当てはまる。「私たちの美に対する基準は同じではない。たとえば、私たちは山を特別視する、そして孤独は、疑わしきものではなく、健全なものと見る。しかし、人はいつの時代でも楽しみのために山に登っていたとはかぎらない。ジャック・ペレティエーは、風景を描写する長編詩の中で、誰が好き好んで山登りなどするものかという、その時代の感覚をよく伝えている」[29]。それはさておき、佐美雄は、敬愛する光仁天皇についての古い和歌を念頭に、次の短歌を詠んでいる。

高円の	After climbing
山越えて来ぬ	Mt. Takamado
田原なる	How deserted is Emperor Kōnin's Tomb in Tahara
みささぎさびし	A scattering of late cherry-blossoms[30]
おそ桜散る	

発句は先の短歌とほぼ同じだが、ここでは一人の旅人ではなく、力ある者もいずれ凋落することや、天皇の歴史、そして誰にも訪れる運命が強調されている。佐美雄自身の経験と歴史とがうまく混交されて、この本は、年代記と日記の性格を合わせもつ一冊になっている。個人的な色調は消えることなく、この章の終わりには次の歌が載っている。

27　前川佐美雄『前川佐美雄全集』第 2 巻、398 頁。
28　前川佐美雄『大和まほろばの記』73 頁。
29　Louisa Mackenzie. *The Poetry of Place: Lyric, Landscape and Ideology in Renaissance France*. Toronto, London: The University of Toronto Press, 2011, pp. 22–23.
30　前川佐美雄『大和まほろばの記』77 頁。

神野山の	Invited to
つつじ祭に	The azalea festival
招(よ)ばれ来て	On Mt. Kōnoyama
のどに花かげに	Under the shade of the flowers
酔ひて眠れる	At peace, drunk, I fall asleep[31]

この歌のあとに「山中の春は遅い」という記述があり、その数行あとに、自衛隊のヘリコプターに乗ってくださいといわれたが、ことわって山を下りた、という記述があり、すぐさま個人に焦点が戻っている。

最後に、寺に関する歌と散文について検討してみよう。まず、興福寺の近くの猿沢池についての歌から。

夢なるや	Is this dream?
満月照らす	A full moon shining down
猿沢の	On Sarusawa Pond
池に浮かべる	And floating on the waters
花扇船	A flower-fan boat[32]

水面に映る五重塔が美しい猿沢池だが、佐美雄は、寺の境内で行われる采女祭の山車である花扇船が浮かぶさまを描いている。采女祭は、日本古代の王朝風の祭だが、数行あとに書かれているように、これは佐美雄の友人が始めたものである。佐美雄の歌は、奈良を訪れる観光客に、古都の過去に思いをめぐらせてもらうために作られたようにも思われる。

次に、東大寺、とくにその境内にある二月堂についての章からの歌を数首あげてみよう。一週間にわたる修二会とお水取りについての歌である。

衣(ころも)もろに	Tucking up
たくしあげて	Their robes
走る僧	Monks running
見ればかの阿修羅王(あしゅらわう)	Gazing upon this, I think of
飛び跳(は)ぬるごと	The Ashura king a demi-god leaping[33]

達陀(だったん)の	The esoteric Tartar
行法いまし	Ritual is now performed

31 『前川佐美雄全集』第1巻、514頁。『大和まほろばの記』80頁。
32 『大和まほろばの記』16頁。
33 同上、31頁。

さかりにて	At its peak
摩訶不可思議の	What a phantasmagoric world!
世ぞと目つむる	I close my eyes[34]

達陀の儀式は、お水取りの前に行われるもので、僧が走り、身体を礼堂の板に打ちつける激しい行法である。佐美雄は、「達陀」という言葉が、異国風なところがあり、神秘的で、摩訶不思議、説明しきれない雰囲気をもっているという。この行法には演劇の要素がすべて含まれており、最初は苦行する僧侶のレクリエーションだったという。佐美雄は友人に、見ているものを意識しているか、と聞いたところ、見るものがなかったら誰もやるまい、とその友人は答えた。[35] このように、佐美雄は短歌と散文で、古代の儀式を異国風に描き、奈良の風景を、聖地巡りをする観光客、あるいはただの観光客目当てに行われる儀式から受ける仏教的イメージのコラージュ風に描写している。いわば観光ガイドブックの役割を果たしている。この短歌と散文による風景は、ルイザ・マッケンジーによる風景の定義、「風景とは、資本、権力、ジェンダー、そして文化的記憶を原動力とする社会的構築物である」に適合する、構築された「風景」である。[36]

結　論

ジャクリーン・ラベは英国の風景詩を評論して、「詩は地形になる、詩人は、物理的に動けることを利用して、想像上の散策を、実際に旅することと文章を書くことが一体になった活動、おそらく休養と読書も含んだ活動にする」という。ここでラベがいう地形は、ただ単に想像上の内なる空間だけでなく、実在するものである。つまり「詩人こそ場所そのものであり、その場所に詩人が居る」という。[37] これまで見てきた奈良についての短歌に明らかなように、作者を場所と同一視するということは、前川佐美雄の作品に一貫している強い流れである。彼の場合、風景は伝統と歴史ある場所としてばかりでなく、多くの和歌に詠われた歌枕として、特別に文化的な記憶を内包する場所である。『大和まほろばの記』やその他の作品でわかるように、佐美雄は伝統を尊重すると同時に、その場所を近代の旅人、つまり観光客である彼個人の場所にすることで伝統に対抗している。ある場所を文化的遺産として見ることと、観光の名所として見ることとは決して矛盾せず、双方の見方をしてなんら支障はない。旅人としての佐美雄が現れることは、矛盾を抱かせるものではなく、短歌の詠者として、短歌を詠むこと、場所が歌枕になるための根本的な要素である。いうまでもなく、奈良についての深い土地勘があるので、佐美雄は特別な観光客、

34　同上、35 頁。
35　同上、35–36 頁。
36　Louisa Mackenzie. *The Poetry of Place*. p. 24.
37　Jacqueline Labbe. “At the Intersection of Artifice and Reality.” In Christoph Bode and Jacqueline Labbe, eds. *Romantic Localities: Europe Writes Place*. London: Pickering & Chatto, 2010, pp. 25–26.

むしろ観光名所の保護者とでもいうべきであろう。

奈良・大和についての佐美雄の初期の歌集に載る短歌は、故郷に対する居心地の悪さが感じられる。のどかな田舎から脱出して明るい光に満ちた東京へ行きたいという欲求が読みとれ、また奈良の地形も、近代的な大都市とは正反対の、シュールリアリスム的な風景として見たいという欲求もみえる。これらの衝動は、たしかに矛盾しているが、若い歌人佐美雄が当時考えていたこと、つまり日本の詩歌を改革し、ヨーロッパの前衛モダニスト詩のように作り替えるためには、改革しながら和歌の伝統（歌枕なども含めて）へ回帰しなければならない、という考えを正確に反映していると思う。この改革の傾向を佐美雄は、彼の歌の理論と実践が孕む矛盾を反映したものとして「新古典主義」と呼んだ。

奈良についての佐美雄の戦後の短歌は、少なくとも題材が奈良の寺や神社に集中しているという点では、改革的な要素が減り、古典的になっている。佐美雄の戦時中の短歌は、日本の伝統を安定させせよう、狂信的な排外主義を転覆させせようとする意図などから、非常に複雑なものになっていた。佐美雄の奈良についての短歌の中にこの相反する衝動をつぶさにたどってみることは、これからの課題である。ラベの、詩人は地形であるという考え方は、佐美雄に適用できると思うが、地形の感覚の意味を適切に定義することが必要で、この小論の範囲を超えるものである。この意味で、他にもこの趣旨に沿う典型的な歌人が居ないわけではないが、佐美雄の才能は抜きん出ており、風景という概念、風景という詩の姿なくしては佐美雄の短歌は存在しえない。佐美雄の奈良についての短歌研究の初期段階である本報告で、このことを少しでも明らかにできれば幸いである。